孤立死の現場から見えるもの
――「死にざま」から「生きざま」を学ぶために

●キーパーズ代表取締役
吉田　太一　よしだ・たいち
1964年生まれ。大阪市立桜宮高等学校卒業。28歳で引越し運送業を始め、「ひっこしやさんのリサイクルショップ」開業、1999年吉田物流株式会社設立を経て、2002年「天国へのお引越し」をキャッチフレーズに日本初の遺品整理専門業者、キーパーズ有限会社を設立。遺品整理業としての体験をまとめた著書『遺品整理屋は見た！』がドラマ化されるなど、各方面から幅広い注目を集めている。宅地建物取引士、日本ペンクラブ会員。

●日本初の遺品整理業者をたちあげてから、数多くの孤立死の現場に接してきた。遺品を整理する中で、そこから生前の生活ぶりが見えてくると同時に、これからの時代に起きるであろうことも考えさせられる。１人暮らしの高齢者で目立ち始めた孤立死は、これからの時代を生きる私たちに、何を語りかけ、何を警告しているのだろうか。

日本初の遺品整理専門会社

私は15年前に日本で初めてとなる遺品整理サービスを専門とする「キーパーズ」という会社を愛知県で設立しました。現在、直営の全国８支店で遺品整理サービスを提供しており、年間受注件数は1700件を超え、孤立死等の遺品整理のお手伝いも年間に300件ほど行っています。

もともと、大阪で引っ越しセンターを経営し全国初の「ひっこしやさんのリサイクルショップ」を開設し、関西ではよくテレビの取材を受けておりました。そんなある日、舞い込んできた１件の見積もり依頼が新しい事業を立ち上げるきっかけとなりました。私が現場のマンションに伺うと、そこには東京と横浜から来たという女性が２人おられ、一部の荷物の運搬を依頼されたのです。

しかし、部屋には大量の家財道具が残されている状況でしたので、その荷物をどうするのかお聞きすると、リサイクルショップや便利屋をこれから探さないといけないとおっしゃったので、「うちの会社で全部できますので全てお任せくださいますか」とお伝えしました。すると、お二人はびっくりした顔で「こんな時にすべて受けてくれるなんて、まるで神様に見えるわ」とおっしゃったのです。むしろ、こちらの方こそびっくりです。仕事の依頼を受けるだけでもありがたいのに、神様に見えるとは……。

そして、もう一度部屋の中を確認してお話を聞くと、この時は父親のお葬儀が終わったばかりで、残された家財道具を前に、彼女たちはどこから手を付けたらいいのか途方に暮れていたところだったのです。当初は数日滞在して、さまざまな業者に依頼しなければいけないと覚悟していたところに私が訪れて、全て一括で受けると言ったことが想定外だったので「神様に見える」という言葉となったのでしょう。

実際、核家族化が進んで年老いた親と大人になった子が同居する世帯が一般的ではなくなり、少子高齢化などさまざまな社会背景によって高齢単身世帯が増加しているのです。私は、このように子供と同居をせずに、１人住まいになってしまった親と遠く離れて暮らしている人はたくさんいるのではないかと考え、遺族のための遺品整理専門会社があれば助かる人も多いと考えたのです。

しかし、ゴミ屋でもなく便利屋でもない「遺品整理専門会社です」と言ったところで、前例がないのですから、一般の方々には違いが分かりません。ただ「お安く片付けます」では、遺品整理専門サービスをつくった意味がないのです。まず、こだわったのは全国直営で自社スタッフの対応、そして社員にプロ意識を持たせることでした。そして、葬儀についての知識を持つ、遺品の供養祭を行う、相続についての知識も持つ、サービス業としてのマナーを徹底するなどさまざまなメニューを取り入れ、遺族の気持ちになり、キーパーズに遺品整理を頼んだことで、最期をしっかりと送ってあげることができたと遺族が納得できるようなブランド力やイメージを持たないといけないと考えたのです。

今では、遺品整理専門会社としても世間から認知され、遺族からの要望もあり、６年前からは宅建業者の資格も取り、相続不動産の売却のご相談にも対応できるようになりました。９割以上が、入社前から私の著書の読者だった社員で構成されているという、珍しい会社となっております。

遺品が語る真実

遺品整理の現場に訪問し部屋の中に入ると、会ったこともない故人の人物像が分かります。いつもこの位置に座っていたのだなとか、冷蔵庫を開けるとビールが好きだったとか、好きな色や字の書き方など、故人の趣味嗜好が全て分かるのです。

遺品が語る「生きざま」からは、誰も知らなかった真実を発見することも多く、私たちは遺族よりも先にその事実を知り、遺族に伝えるという役割もあります。その真実の中には、伝えたくないような故人からのメッセージもあれば、途切れかかっていた家族の絆をつなぎとめるようなものもあるのです。

動物は死期を悟るといいますし、野生であれば人間と違って誰の手も煩わせず死んでいきます。亡骸によって迷惑を掛けることもなく、遺品整理も必要ありません。それに対し、人間は死を迎える時期が誰にも分かりませんし、誰かに手伝ってもらわないと火葬や納骨、遺品の整理などができず、迷惑をかけてしまうことになるのです。

しかし、未婚者など「おひとりさま」の増加によって、既に自分の死後誰にも手伝ってもらうことができない状況にある人が急増し

ています。家族も無く、友人もほとんど無く、あらゆる人間関係が無くなってしまった人たちの場合、自室で倒れたことを誰に気付いてもらえるでしょうか。年に数回しか誰かと会って会話をする機会もない人が、気付いてもらえることはまずありません。

発見されるきっかけの多くは、①家賃などの滞納、②連日夜中も電気が付きっ放し、③ずっとテレビが付いたまま、④新聞がたまっている、⑤大量のハエが発生している、⑥周辺に死臭が漂いだしている、⑦1階の天井から体液のようなものが垂れてきた――などによるものなのです。私たちの伺う年間200件～300件のこのような現場では、発見が死後数日の場合から、長いものは死後3年も経ってから見つかるケースもあります。

時期にもよりますが、死後1カ月を超えてくると乾燥してきて死臭も減少し、なかなか見付からなくなる可能性も高まります。

ある現場では、浴槽の中で息絶えていたのですが、身体がふやけて原型が分からなくなってしまった状態で見つかったケースもあります。また、畳やフローリングに人型がくっきりと残るようなケースでは、状況によっては死後3日～4日で腐乱が始まることもあります。

別のケースでは、同じ団地の同じ階段を毎日使っているのにも関わらず、1階下の部屋の父親の死に1カ月間気付かなかった方もおられました。実際には、ウジ虫が部屋の前に出てきて死臭もかなり漂っていたので、息子さんは気付かないフリをしていたのかなと疑ってしまったこともありました。この場合は、室内がゴミ屋敷状態でしたので、おそらく何年もの間、家族も含め第三者が部屋の中に入ったことはないのではないかと想定されます。ご請求した費用は、2DKの部屋で遺品が約4トンの遺品整理と、死臭の脱臭や室内消毒、清掃までをふくめて70万円ほどだったと記憶しています。

このように身内の死に伴い、葬儀代金などの費用以外に大きな出費がかかることもあると、想定されている人はほとんどいないと思われます。

「おひとりさま」の激増

このように死後発見が遅れてしまった孤立死の現場では、ある程度の共通点があります。普通は、汚れたらきれいに拭く、出したらしまう、借りたら返す、壊れたら修理をする、喧嘩したら仲直りをするなどと、当たり前のように元に戻すために行動し、その状態を保ちながら生きています。

しかし、社会から孤立して人間関係が途切れた人たちは、このようにバランスを意識している人はほとんどいないようです。なぜなら、私たちの行動には相手を見ながら判断していることが多く、無意識のうちに比較対象と自分を比べながらバランスを保っているからです。ところが孤立している人は、他人から指摘を受けることも他人と比較することも少ないので、バランスを崩したままで生活している人も多く、人間関係においては不健康な状態にあるのです。

今ご説明したように、比較対象に合わせてバランスを取ろうとすることはとても大切なのですが、同時にとても面倒くさいことでもあり、またその比較対象によって精神的にダメージを受けてしまうこともあるのです。そこで、人間は面倒くさいことや、煩わしいことを避けてでも楽しく生きていけるための物やサービスを開発するようになったのです。大きく3つに分けることができます。

その1つ目は住宅で、単身者専用のワンルームマンションが普及し、ご近所付き合いを極力しなくても生活できるようになりました。2つ目は、コンビニや持ち帰り弁当などの中食産業の発達による食生活の変化です。24時間、都合の良い時に、誰ともほとんど会話もせず、すぐに食事が取れる環境が生活スタイルのリズムをバラバラにしています。3つ目は室内での過ごし方の変化です。エアコンの効いた快適で誰にも干渉されない室内で、1日中画面を見て過ごす生活スタイルが当たり前となったのです。テレビの登場から、ビデオ、DVDやパソコン、そして今はタブレットや携帯電話、スマートフォンとなり、1日中携帯の画面を見て過ごす人が多くなっています。

ゲームやSNSなどをしていると、あっと言う間に時が過ぎます。また、画面の向こうにいる人との関係はリアルな人間関係とは違い、自分にとって都合が悪くなれば電源を落としたり、チャンネルを変えるだけで済んでしまうため、相手に合わせる必要が無いのです。そして、その環境に慣れてしまって人間関係に不器用な「おひとりさま」が激増しているのです。

孤立しやすいのは男性

現在の、孤立死に至ってしまった方の多くは、高齢になってから1人住まいになり孤立してしまった場合が多いのですが、男女を比較すると男性の方が社会から孤立しやすく、その結果孤立死に至ってしまうという流れが分かります。

本来、理想を言えば1日24時間のうち8時間寝て、8時間働いて、8時間遊ぶという生活スタイルが実行できれば、非常にバランスのとれた健康的な状態でいられて、社会からも孤立しにくいのではないかと思いますが、現代社会でそんな生活のできている人はほとんどいないでしょう。

その中でも日本の男性サラリーマンの生活スタイルは、仕事が中心となり、あとは寝ているだけという人が多く、仕事関係以外の人間関係を持てない方が多いのです。そして、会社を退職後その人間関係は一斉に無くなるのです。今まで周りにいた人が誰もいなくなって、行く場所も、することも無くなってしまいます。自宅周辺の人間関係はほとんど無く、仕事以外の話の話題をほとんど持たない男性は日に日に自宅へ引きこもってしまうのです。

私の著書『おひとりさまでもだいじょうぶ。』（ポプラ社）に、私と社会学者の上野千鶴子氏との対談が収録されていますが、そこで上野氏は、女性は「弱さ」を共有することで人間関係を築くのに対して、男性は相手を値踏みしながら「覇権型」の人間関係を築いていくと述べています。退職によって、明確にアピールできるような社会的な位置付けや肩書きを失った男性は、女性のように「弱さ」をさらけ出すこともできず、人と会うのがおっくうになってしまう傾向があるようです。

そのため、特に早期退職制度などによって、解雇された中高年がこのような状態に置かれやすく、次第に自宅に引きこもり気味となっ

てしまい、数週間も会話の無い生活を送ることもあるのです。すぐに仕事を見つけ働ければいいのですが、中高年の再就職は難しいのが現状です。また中高年の男性にとって自分が無職であるという現実ほど孤立感を感じ、ネガティブになってしまうことは無いのではないかと思います。同窓会に誘われても行きづらいと感じる人の方が多いでしょう。

人との会話はある程度の頻度で行っていないと、会話することが怖くなったり、何を話せばいいのかわからなくなり、徐々に人間と会うことにさえ抵抗を感じてしまうのです。このようにほとんど外出することも無くテレビや、パソコンに向かって生活している人が恐ろしく激増している事実を知っておかなければなりません。また徐々に未婚者も増加しており、１人っ子の未婚者が親を亡くすと身内が完全にいなくなります。そのうえ人間関係が無く社会から孤立していた場合――。遺品整理どころか、お葬式を上げてもらえる身内が1人もいないことになるのです。

まさに、冒頭にご説明したように「自分の死後誰にも手伝ってもらうことができない状況にある人」が急増しているのです。自分のお葬式や遺品整理を誰にも頼めない人が今後増加するのは間違いありません。かなり厳しいお話ですが、このような現実に異論のある人はいないでしょう。

「中年層の孤立死」という警告

先日、弊社にNHKから、中年層（40歳～60歳）の孤立死についての取材依頼があり、『おはよう日本』でその模様が放送されました。

取材当初、「中年の孤立死が増えていると聞くのですが、何か原因や傾向はありますでしょうか」というディレクターの質問があったのですが、私はその質問に違和感がありました。なぜなら、まず世間で言われている「孤立死」の定義が存在しないということと、意外に若い人の孤立死も多いけれど、中年層の孤立死が近年増加していると感じたことがなかったのです。そして、普通は中年の人が寿命で亡くなることは無く、病気か事故か自死による死亡がほとんどのはずなので、現在中年の死が極端に増加しているという訳ではないからです。

確かに人間関係が乏しく社会から孤立してしまっている中年層以下の１人住まいが増加しているということから考えると、部屋で亡くなっていても気付いてもらえないケースは、若干増えているかもしれません。

つまり、孤立死を問題視するのではなく、孤立化や未婚化によって1人住まいが増加し自宅で亡くなってもなかなか気付いてもらえない状況にあるのが、現在の中年層の生活の実態となっていることに注目する必要があるのです。

このようなことからも、中年層が高齢者となる20年～30年後の孤立死の発生率が極端に増加することが推測されるので、人間関係の維持の重要性を中年の人々に認識してもらわなければならないのです。そう考えると、増加しているかどうかではなく、中年層の孤立死という現実はこのような意味での「警告」だと受け止めなければならないと思うのです。

その一方で、孤立化がくすぶり始めている20歳代以下の世代に、将来にわたり人間関係の必要性などをどう伝えていけるかが重要になってくるのではないかと考えます。

しかし、やっかいなことに人間には欲があり、人間関係には煩わしさがつきものなので、１人での生活の気軽さや自由のメリットに反する、譲り合い、気を使い合う人間関係を避けてしまう傾向があるのです。実は、これは今に始まったことではなく昔から人間関係の煩わしさはありましたが、過去の社会構造上においては、その煩わしさを我慢した方が生活しやすかったのです。

しかし、近年その煩わしさを我慢しても何のメリットも得られないし、それどころか真面目に人間関係を保つ努力している人が煙たがれるなんてこともあり、あえて自分から人に接触する人はどんどん減少しています。過去との比較によってこれらの現状は「問題」だとされていますが、問題視するよりも「現実」として受けとめ、生活スタイルを変化させて対応できるように考えるべきかもしれません。

私は孤立化を防ぐため、いろいろな提案をしていますが、そのなかに「夕食家族」があります。住むところは別々、年齢も性別もバラバラですが、夕食だけは一緒に食べる仲間をつくるということです。月ごとの会費制でもいいですし、１食500円とか、それぞれの経済的な事情によって設定すれば良いでしょう。会場はメンバーの家を持ちまわりにしても、外食でもかまいません。

また、毎日でなくてもいいと思います。１週間のうち、何日か曜日を決めて、その日の夕食だけは集まるようにする。そうすると、誰かが来なくなったりすると、何かあったのか気になりますし、緊急の事態の場合は早期発見につながります。

身内という歯止めのない人間の増加

NHKの『無縁社会』という番組が有名になりましたが、今後は『未婚社会』『孤立社会』さらには、『無責任社会』という番組が放送されてしまうかもしれません。

人間にはズルいことや悪いことをしそうになった時に、「親に申し訳ない」や「兄弟に迷惑を掛ける訳にはいかない」など考えるように、家族の存在という歯止めがかかります。しかし、先にも述べたように家族どころか身内が全くいなくなってしまった場合、歯止めを持たない人間がどれほど自分の良心だけで立ち止まることができるでしょうか。

日本経済も頭打ちとなり、人口の減少がそれに拍車をかけるように今後経済的にも厳しい生活に置かれる人たちの割合は増加する可能性が高い現状です。精神的にも経済的にもゆとりのない人たちが、他人に対する思いやりを持つことはとても難しいことです。しかし、現実にそのような状況が迫りつつあるのです。

このようなことからも、現状の孤立死の増加かどうかが問題ではなく、今後30年～50年後の日本社会では、孤立者の割合が激増する可能性が高いことを冷静に認識し、対策を講じることが必要となってくると言えます。

しかし、20年～30年先には、この社会的問題を生み出した張本人である、現在の日本のリーダーの大半が引退していたり、世の中を去っているのです。実際にこの問題に直面し、困難に対処しなくてはいけない世代の主流は、まだ未成年なのです。そう考えるとなんともやりきれなく、とても矛盾しているのですが、これも現実なのでしょう。